

國學院大學學術情報リポジトリ

紹介 花部英雄編著『雪国の女語り：
佐藤ミヨキの昔話世界』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 米屋, 陽一, Yoneya, Yoichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000067

〔紹介〕

花部英雄編著 『雪国の女語り』 佐藤ミヨキの昔話世界

米屋陽一

國學院大學で旧日本文学第二研究室の白田甚五郎先生や野村

純一先生に出会い、伝承文学、口承文芸学、民俗学などを学び、その魅力に燃え上がっていた若き学徒は大勢いた。それは先生の魅力であると同時に学問・研究への魅力でもあった。白田先生が提唱され、野村先生が発展的に継承された「実感・実証」の学問・研究の姿勢は、次の世代にも確実に継承されていった。フィールドワークをけつして手放してはならないという姿勢も現存している。本書は白田・野村先生が築き上げてこられた本学の口承文芸学の流れのなかに位置づけることができ

よう。

「佐藤ミヨキ略年譜」などによるとミヨキ媼は、一九一〇（明治四十三）年四月二十一日、新潟県入広瀬村大板山（現、魚沼市）に生まれた。この年は『遠野物語』（柳田國男）の刊行と同年である。一九二六（大正十五）年、同守門村大倉（現、魚沼市）の佐藤勘一郎と結婚、三男五女をもうける。二〇一四（平成二十六）年現在、一〇三歳。ミヨキ媼が九十五歳の二〇〇五（平成十七）年に編著者との出会いがあった。それから足繁く通い続け、その成果として本書は刊行された。

本書の構成は、「地図・はしがき・凡例」、「資料編」Ⅰ 佐藤ミヨキ唄の語る昔話」七二話、「Ⅱ 佐藤フミイの昔話」一五話（ミヨキ唄の四女）、「Ⅲ 佐藤敏治の昔話」二話（ミヨキ唄の長男）、「Ⅳ 浅井八郎の昔話」三話（ミヨキ唄の弟）、「解説編」「解説 雪国の女語り」「佐藤ミヨキ昔話 話型対照表」「あとがき」からなる。

解説の内容は、「Ⅰ ミヨキ唄の経歴—昔話のためのライフヒストリー—」「Ⅱ 昔話の環境—地域性と独自性—」「Ⅲ 昔話の記憶—語りの場と空間化—」「Ⅳ 昔話の継承—次世代への伝承—」であり、従来の単なる解説の域を越えた五四頁からなる論文である。

ミヨキ唄の語る昔話は、「ざっとむかしあった」と語り始め、「いっちごさつけ申した、鍋ん下ガラガラ」と語り納める。発端句「ざっとむかし」の分布は福島県にも連なっており、結末句「いっちごさつけ、鍋ん下ガラガラ」の分布は、長岡市一带に広がりを見せている。ミヨキ唄は現在では数少ない本格的な伝承の語り手で、収録された昔話の七割は本格昔話であり、「雪国の女語り」と呼ぶにふさわしい。圧巻といわざるをえない「女語り」は解説と連動させることによって、「佐藤ミヨキの昔話世界」に接近もしくは突入してしまう仕組みに

なっている。実に不思議な解説・領域である。

「昔話の環境」には「嫁いだ大倉は稲作が主であったが、ミヨキ唄は家族の衣服用に機織りをしていたという。数キロしか離れていない距離に嫁ぎながらも生業的には大きな違いがあり、大栃山の実家の養蚕が忘れられなかったのであろう。そうした社会経済の状況や地域環境を視野に置きながら昔話をとらえていく必要がある」と主張する。

そして、「ミヨキ唄の昔話の特質」では、「昔話はすぐれた個人的な営みではあるが、同時に地域に限定されたものでもある。人の成長が成育環境に大きく左右されているのと同じように、昔話も聞いた環境に深く影響されていることはいうまでもない」とし、「ミヨキ唄の昔話を地域環境面から分析しながら、その特性を明らかにしていきたい」という。

編著者は近隣の伝承圏の記録として『いりひろせ物語』（水澤謙一・一九八九年刊）、「とんと昔があったけど 第一集」（水澤謙一・一九五七年刊）、『加無波良夜譚』（文野白駒・一九三三年刊）を取り上げ、『日本昔話大成』（関敬吾 の話型名に従って、「尻尾の釣り」「猿蟹合戦」「猿智人」「三枚のお札」「食わず女房」など三十六話をあげて「共通話型一覧表」を作成、丁寧な分析を試みている。その結果、ミヨキ唄の語りには

「母セツの昔話が色濃く滲み出ている。いうなら二人の女性が創り上げ醸成してきた昔話という印象が強い。「女語り」と呼ぶにふさわしい内容である」としている。さらに「一覧表にない昔話の検討を試み、「ミヨキ昔話」の独自性を展開させている。

「Ⅲ 昔話の記憶——語りの場と空間化——」は、「昔話の修得」

「昔話の記憶と繰り返し返し」「昔話の記憶と空間化」と展開させ、「母からの昔語りをすることで聞き手であった自分の幼い頃に戻っていたであろう」「九十五を超えたミヨキ唄にとって、かがえのない幼い頃の母や大栃山で育った黄金時代のイメージに、語りが奇しくも運んでくれていたのであろう」といい、「語る行為でしか取り戻せない何か」「語りのもつ声の力と呼ぶしかないもの」との指摘を昔話を研究する人たちが、愛する人たちは素直に受け入れねばならないだろう。

また、「昔話「ウサギどんとフキどん」の対照表」を示し、「いりひろせ物語」と本書に掲載されているミヨキ唄の話、佐藤フミイ、浅井八郎の話が紹介されている。細部にわたって比較検討された後に、「このようにして生まれ育ってきた環境の中で育んできた昔話とその地を離れて、新たな土地の環境でたくましく生きていくことになる。時代や男女差、語り手の性格を超えて、昔話は生き続けていくのである」。そして、「昔話の

継承」において、「ミヨキ唄の昔話は、語り手が物語を統括している」といい、「登場人物を動かし、演技させ、生活の彩りや心の陰翳まで表現し作品を完結させている」「熟成した語り」と絶賛し、「唄の生活体験を語りに反映させてきたからであろう」と解いている。

六〇年代終わりから七〇年代の初頭にかけて刊行された『吹谷松兵衛昔話集』『萩野才兵衛昔話集』『関澤幸右衛門昔話集』（野村純一）は、少し前の民俗社会に生きていた昔話の語り手、語りの場としての囲炉裏、一族一統の伝承実態をみごとにまでに甦らせ、口承文芸研究に携わる人たちを震撼させた。この間の研究成果は、『昔話伝承の研究』に収められている。編著者は前掲の著作を評価しつつ、「人から人への伝承といった視点は見られず、もっぱら家の伝承に限られた嫌いがある」と指摘する。本書では難解な謎解きでもするように論を一歩前進させ、ミヨキ唄の昔話の伝承実態を深部にまで食い下がつて丁寧に解き明かしている。

「はしがき」に「個人における昔話集としては、これが最後になるかもしれない」と編著者は記している。日本列島は、伝統的な伝承の昔話の語り・語り手・語りの場時代から、新しい昔話の語り・語り手・語りの場の時代へ、大きな転換期を迎え

ている。本書は伝承の記録として、口承文芸（昔話）史上あるいは口承文芸学史上に、記念碑的な役割を担って存在しているといえる。と同時に、本学の口承文芸学研究の一端を垣間見ることができ、いつまでも語り継がれてゆくに値している。

近年、昔話伝承を一度も聴いたことがない若い世代が、口承文芸に関する学会で研究発表することが目立つようになった。記載文芸の研究と口承文芸の研究が同じような方法論であってはいらないと思っている。昔話伝承は終焉の時期を迎えているのだから仕方のないことなのかもしれない。しかし、口承文芸の研究と名を打つのであるならば、フィールドワークを手放さずに、聴き耳を立てること、聴き手になることを忘れてはならない。

フィンランド文学協会（SKS）内には、世界をリードする形で「口承文芸資料局」が設立された。わが国では二〇〇一年以降、「日本民話データベース作成委員会」（委員長＝樋口淳・専修大学教授）によって、音声記録した約六万三千件のデータをデジタル保存し、検索可能なシステムを構築してきた。二〇〇六年には「NPO法人沖縄伝承話資料センター」が設立され、「沖縄伝承話データベース作成委員会」の協力を得て、約七万六千件のデジタル化が進められている。宮城県仙台市は

「みやぎ民話の会」の協力を得て、県内の民話伝承と東日本大震災を語り継ぐために、全国に先駆けて「民話 声の図書室」が活動し始めた。

本学の文学部日本文学科には「伝承文学コース」が設置されており、全国から若き学徒が渋谷に集い、伝承文学、口承文芸学、民俗学などの領域を学び、本学の「伝承文化学会」や関連する学会などで研究発表している。文献資料のみではなく音声（録音）資料をも含め、日本の拠点になるような「口承文芸資料センター」の設立を求める声は多々ある。

（A5版、三五二頁、三弥井書店、二〇一四年二月発行、定価七五〇〇円＋税）